

保険毎日新聞「みちくさ保険物語」034

近代建築史上の保険会社_05_第二世代の建築家_中村與資平

名古屋の工業大学に勤務している友人から、映画「駅前弁当」の紹介があった。この映画は、東宝の駅前シリーズの第3作で1961年に公開されたもの。浜松の自笑亭という駅弁屋をもとにした映画だという。私の父親が、私に「病気になっても自笑亭の駅弁を食べさせると治ってしまった」というほどの駅弁だが、駅弁の内容は覚えていない。名古屋の友人は、高校同窓生のMLで、われわれの世代が小学校低学年だった頃の懐かしい浜松の町の姿が見られると薦めている。ぜひ見てみたい。

この情報のおかげで、古い浜松の絵葉書をいくつか入手していたことを思い出した。「鴨江観音」、「縣居神社」、「天林寺」、「浜松公会堂」および「浜松城址」が、浜松名所として紹介されている。昭和30年代初期のものである。これらの画像を当該MLで披露すると、友人から「浜松公会堂」の設計者が中村與資平という人であり、しかもわれわれの高校の前身である浜松中学の卒業生であるという指摘を受けた。

中村與資平は、ウィキペディアによれば、1880年に現在の浜松東区に生まれ、浜松中学を卒業したあと、第三高等学校、東京帝国大学建築学科に進み、卒業後は辰野葛西設計事務所に勤務した。1907年に第一銀行韓国総支店臨時建築部工務長となったのを契機に1908年からはソウルに移り住み、朝鮮銀行本店など数多くの設計に関係した。1921年に欧米視察旅行をした後の1922年には東京に移り、中村工務所を開設した。そのご戦時中に東京の事務所を閉鎖して浜松に疎開し、1963年に逝去するまで静岡を中心に主に教育等の分野で活躍した。藤森照信『日本の近代建築（下）』岩波新書によれば、大正末に中小住宅から流行しはじめたスパニッシュ様式を公共建築に採用した建築家として紹介されている。昭和6年竣工の豊橋公会堂と昭和9年竣工の静岡市役所である。

画像として掲載している浜松公会堂には、幼い頃のかすかな記憶が残されている。それは、幼稚園の学芸会で会津白虎隊の群舞を踊ったことである。踊ったことは覚えていないが、公会堂というところで学芸会をしたということは確実に覚えている。なぜ会津白虎隊だったのかは、江戸時代に天領であった浜松という土地柄から理解できる。昭和2年に竣工した浜松公会堂は、残念ながら取り壊されてしまい現存しない。

しかし公会堂の近くに、中村の作品が一つ残されている。浜松銀行集会所(S5)の建物である。子供心にもその白い姿は異国情緒が感じられ美しく思われた。建築様式については詳しくないので間違っているかもしれないが、これも藤森が指摘したスパニッシュ様式とみてよいのかもしれない。この建物は幸いにも現存し、木下恵介記念館となっている。

中村與資平の設計した建築物については、西澤泰彦「中村與資平－海外を見た建築家」(INAX REPORT, No.187)に詳細なデータが掲載されている。それによれば、中村は、保険会社関連の建築物を二つ設計している。大安生命保険会社(東京)と東洋生命保険会社(東京)である。両社の名前を知っている人は多くないと思われるが、少なくとも東洋生命は、大正時代から昭和初期にかけて熱心な営業方針によって、大きくはないが一定の存在感を

示していた会社である。

大安生命保険の本社については、絵葉書が残されている。建物の形は変哲もないキューブの形状なのだが、抽象化されて5本の柱とロマネスク風の玄関と三階の窓がバランスよく配されている美しい建物である。また三階の出窓風の突起物は建物をさらに個性的なものとしている。営業報告書からこの社屋の竣工年を確認してみた。同社は、大正15年に横浜から東京に本店登記を変更している。その頃から本社屋の建設の計画があったようだ。絵葉書にある本社が、営業報告書に登場するのは昭和3年を営業年とする第15回営業報告書である。不動産明細表に「東京市京橋区南金六町14番所在建物」として「鉄筋コンクリート造陸屋根三階建地階付洋風」として「建坪58.77、延坪235.08、85,715.3円」と記載されている。前年にはこの記載はなかったため、竣工年は昭和3年と思われる。

東洋生命について本社に関する詳細なデータは手元にないが、同社の営業案内には本社の画像がしばしば使われているので、建物の姿についてはわかる。引用したのは、同社の後ろ盾であった渋沢栄一の姿が印刷された営業案内である。東洋生命本社は、大安生命よりも大きな建物に見えるが、ロマネスク風の玄関、三階の窓、そして突起物など、大安生命の本社と基本的なコンセプトが共通している。同社の営業報告書の不動産明細表にこの建物が登場するのは、昭和4年を営業年とする第30回営業報告書である。関連の建物と一緒に記載されているのでわかりにくいですが、「鉄骨煉瓦石造4階建1棟」と読める。このことから東洋生命の本社社屋は、昭和4年中に竣工したものと推定できる。

西澤泰彦によれば、中村與資平は大正13年に京城の事務所を閉鎖し、大正15年には設計部を新宿に移転したということなので、両保険会社の本社社屋は、日本に拠点を置いてからの作品ということになる。中村の仕事が第一銀行とのつながりが強かったことから、第一銀行の後ろ盾をもって経営していた東洋生命の本社にかかわったことは想像に難くない。また大安生命ももともと横浜正金銀行出身の銀行家による会社だったことから、関係があったことが考えられる。

両保険会社ともに、戦前の保険業史の中で成功したとはいえない会社である。大安生命は、大正2年8月に設立された会社であるが、同時代の保険評論家である稲見の同社に対する舌鋒は鋭い。「元正金の重役だった故木村利右衛門翁が79歳の老後に於いて、社会奉仕の為にといつてつくられたものだそうだが、いま思うととんだ社会奉仕だと言いたくなる。」(中略) 現社長は翁の養子木村庫之助君、専務は翁の外孫、宛然たる家督相続で子孫のために美田ならぬ会社をおこして残した姿である」(稲見泰治『保険はどこへ』文雅堂、1926年、114頁) 同社は、昭和8年12月に片倉生命に吸収合併される運命となる。

東洋生命については、『朝日生命百年史・上巻』(1990年)の「東洋生命小史」に詳しい。結局、渋沢栄一の第一銀行の後ろ盾を生かせず、昭和11年に帝国生命(現朝日生命)に合併されることになった。

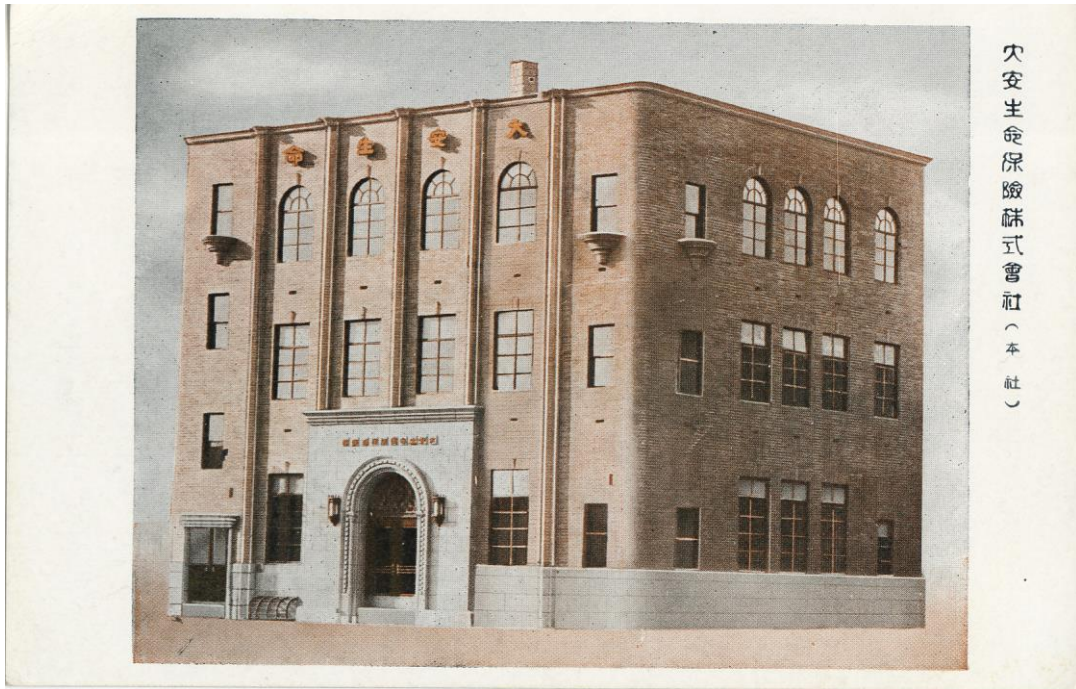
今回は、第2世代の建築家として中村與資平を紹介したが、中村が辰野金吾に直接に指導を受けているため第2世代とした。建築史研究における学術的な知見にもとづいた分類

保険毎日新聞「みちくさ保険物語」034

でないということを最後に付け加えておきたい。



浜松公会堂（昭和2年竣工）



大安生命保険株式会社（本社）

大安生命保険の本社（東京、昭和3年竣工と推定）



大安生命保険株式会社（社長室）

大安生命本社社長室



長社役總取
大 雄 村 木

爵 子 澤 造

役 議 相
助 之 勇 木 々 佐

地 番 八 目 丁 二 町 手 大 區 町 麴 市 京 東

社 會 式 株 險 保 命 生 洋 東

番 一 八 四 二 表 代 自 } (23) 内 ノ 丸 話 電
番 五 八 四 二 圖 至 }

東洋生命の本社（東京、昭和4年竣工と推定）